

若手邦楽聴き比べ



【開催日】平成30年8月21日（火）

【会場】東京都美術館 講堂

【主催】邦楽実演家団体連絡会議

【助成】アーツカウンシル東京

（公益財団法人東京都歴史文化財団）



長唄

「菖蒲浴衣」

唄

東音 野呂美貴
東音 半田綾子
東音 伊藤薫子
東音 渡辺麻子
東音 榆井李花
東音 長井麻江

笛 福原洋音
小鼓 福原千鶴
大鼓 望月太左乃
太鼓 堅田喜代実

幕末の安政六年、前半を三世杵屋正次郎・後半を二世杵屋勝三郎の作曲で、五世芳村伊三郎の襲名披露に発表。五月雨を表す前弾きや、隅田川を表す佃の合方があり、歌詞に「己が替え名を市中の」と名披露目の文句が入った華やかな曲。替手で音の厚みを増し、二度の転調で音域を上げていく三味線の手附けと、夏らしく明るい唄の節附けが調和して広く親しまれています。作曲者の一人・三味線の勝三郎と唄の伊三郎の不仲を、もう一人の作曲者・正次郎が取り持つて共演させたと言われ、歌詞にも「もつれを結ぶ盃の」と織り込まれています。

詞章

本調子へ五月雨や 傘につけたる小人形 晋子が吟もまのあたり 己
が換名を市中の 四方の諸君へ売り広む 拙き業を身に重き 飾
りの兜の俤うつす 皐月の鏡曇りなき 柳の二葉の床しさは 今日
の晴着に風薫る 菖蒲浴衣の白襲ね 表は縹紫に 裏紫の朱奪う
紅もまた重ぬるとかや へそれは端午の辻が花 五とこ紋のかげひ
なた へ暑さに 二よりへつくる雲の峰 散らして果ては筑波根の
遠山夕暮繁り枝を 脱いで着替えの染め浴衣 古代模様のよしなが
き 御所染め千弥忍ぶ摺り 小太夫鹿の子友禅の おぼろに船の
三下りへ青簾 川風肌にしじみと 汗に濡れたる枕がみ 鬢のほつ
れを簪の 届かぬ愚痴も惚れた同士 命と腕に堀切の 水に色ある
花あやめ 弾く三味線の糸柳 へ縫れを結ぶ盃の 行く末広の菖蒲
酒 これ百葉の長なれや へめぐる盃数々も 酌めや酌め酌め尽き
しなき 酒の泉の芳村と 栄うる家こそ目出度けれ

琵琶

「扇の的」

琵琶 坂本穂香

源平合戦、屋島の戦いのお話です。沖の平家方と陸の源氏方は、その日、相譲らず、戦いも夕刻を迎えました。その時、沖の平家方から女官を乗せた舟が一艘現われ、この扇を射てみよ、とばかりに手招きを始めました。これを見た源氏の大將、源義経は、何としても敵の挑戦に勝たねばならぬと家来に弓矢の名人を推挙させました。命を受けた若武者、那須与一にとって弓矢の名人といえども、薄暗い夕方、激しい北風に舟と扇が揺れる中、無事に扇を射落とすことは至難の技です。あらゆる神に祈り、舟を漕ぎ出しました。

さて、那須与一は見事に扇を射落とすことができるでしょうか。

詞章

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり 沙羅双樹の花の色 盛
者必衰の理をあらはす 奢れる者は久しからず ただ春の夜の夢の
如し 猛き人も遂には亡ぶる 習ひなれ
夕日に映ゆる如月の 風まだ寒き 屋島潟 数多の人に押されつ
つ まかり出でたる若武者は 花も蕾の十七歳 下野の住人資高
が一子 那須与一宗高なり 千軍萬馬の老將の 並み居る中に
召し出だされ 家の面目 身の誉れ 君の仰せをかしこみて 波
打ち際に乗り出だす 入陽傾く屋島潟 さつと乗り入る海の面
渡る潮風いと強く 打ち込む波の高ければ駒のあがきの定まらず
扇も風にたまらねば くるりくるりと打ちまわり狙い定むるすべも
なし 宗高運の極みかと 眼を閉じて心を鎮め南無八幡大菩薩
氏神那須の大明神 今の与一を哀れとも 見給う慈悲の 存し
まさば この波風を打ち鎮め 扇を射落させ給えやと 一心こめ
てぞ祈りける 念じ給ひて眼をば 開けばさても 不思議な波

風はたと鎮まりぬ 宗高心勇み立ち 十二束三つ伏の鎬矢を 爪
やりしてぞ 抜き出だし 握り太なる重藤の 弓に食わせて引き
固め 狙いをきつと定めしが ひようと放ちし命矢は 発止と射切
つて 矢は海に 扇は空へ舞い上がる 舷たたく平家方 籠を鳴
らす源氏方 敵も味方も感にたえ どつと揚げたる鬨の声 しば
しは鳴りも止まざりき

常磐津

「釣り女」

浄瑠璃 常磐津若羽太夫
常磐津千寿太夫
三味線 常磐津美寿郎
岸澤満佐志

本題は戎詣恋釣針。河竹黙阿弥作詞、六世岸沢式佐作曲。明治十六年(一八八三)十二月、それまで不和であった常磐津・岸沢両家和解の披露をかねて発表されたといひます。その後、竹柴晋吉が手を加えて、明治三十四年七月東京座で「戎詣恋釣針」の題で上演され、松羽目物流行の時代もあつて、以後たびたび上演され、流行歌になりました。
もとは狂言の「釣針」。原作では大名が姫君と腰元数人を釣るのに、常磐津では大名も太郎冠者も一人しか釣らないのが特色です。

詞章

抑々是は猿楽の 昔よりして 其業の 可笑と云いし 狂言師 名に大蔵や
驚流の 姿を写す 釣女

大名(以下大)「ヤイ太郎冠者 今宵は通夜をしよう 汝もまどろめ」
太郎冠者(以下太)「畏つてござる」
大「アア とうとや とうとや」

内陣の内ぞ床しき 我が妻を 千代と契らん手枕の 袖を覆ふて まどろみし
が 程もあらせず 夢さめて

大「ヤイヤイお告げがあつた 汝が妻になる者は 西の門の一の階にあらう程に

連れて帰れ とお告げが」
太「是はいかな事 私がお告げもその通り」
大「急いで参ろう 急いで参ろう」
勇み悦ぶ足元に 落ちたる竿を取り上げて
大「ヤ これはいかな事 妻ではのうて 竹の先に糸が付いてある これは何であらうぞ」
太「ふしぎなお告でござりますな」
大「イヤ 是はさうした 恵比寿殿はふだん釣竿を離さず 釣ばかりしてござるによつて 此の針で 妻を釣れ と云う 事であらう 先づ 急いで釣りましたやう エイ エイ」

釣ろうよ 釣ろうよ 神の教えの釣針を 下し見め良き 妻を釣ろうよ
針を下せば 不思議やな 気高き女を釣り上げて

大「ア、有難や 扱も良い妻がかうてござる 嬉しや嬉しや」

太「何が扱 お悦びでござる」

大「これこれ そなたは定まる妻じやによつて 目をかけてやる程 に夫を大事にしなましようぞ ヤア 小野小町か 楊貴妃か ア、美しや美しや」

太「イヤ申し申し 道々こうそり楽しもうと背中へ入れてき た此吸筒

お二人様の三々九度是にて目出度うご祝言」

大「これは一段の事じや サアサア つげつげ」

太「心得てござる」

大「先づ 女子の方より さしませい」

姫「申し我夫 必ず見すて、下さるな」

大「なんの見すて、良いものか」

姫「ヲ、嬉し」

太「ヤ申し申し 其釣竿を私にお貸し下され 見事釣つて見せましよう」

大「早う 釣れ 釣れ」

太「イヤモウ 釣る段ではござらぬ エイ エイ」

釣ろうよ 釣ろうよ 釣る物は何々 鯛に鱈に 恵方棚に つき鐘信田の森の
狐にあらぬ 釣針を さげておろして 三十二相揃うた 十七八を 釣ろう
よ 釣ろうよ おかつさんを釣ろうよ 余念も長き 鼻の下 オ、当るぞ
ヨ 当たるぞ ド、どつこいめた と引き上げれば 被衣目深に かつきし女

太「ア、ア、とうとや 掛つたわ 掛つたわ サアサアこちへござれ 嬉しや

嬉しや さあさあ是からは 三々九度の盃じや これへござれ 何もそ

う恥かしい事はない そなたと夫婦 になるならば 春は花見 夏は
涼み 秋は月見の酒盛りに 冬は雪見のちんちん鴨 天にあらば比翼の
鳥地に又あらば 連理の枝 必ずそもじは 変るまいな」

醜女「何の変つて 良いものかいな」

太 「先づ 何はともあれ 一寸ご面相を」

と 被衣を取ればごはいかに 河豚にひとしき 醜女ゆえ

太 「ヤア 和御寮は鬼か化物か のうのう 消えてなくなれ消えてなくなれ」

醜 「ノウノウ 我夫 今おっしゃった楽しみは 嬉しうて嬉しうて 私や忘れは せぬわいな」

太 「ヤレ情けない ゆるいてくれ ゆるいてくれ」

醜 「そりゃつれないぞえ 太郎冠者殿」

コレ こつちら向んせ 何じやいな 思えば深い恋の淵 沈む我が身を 釣糸に はなれはせじと 取り継る

太 「のう 恐ろしや 恐ろしや」

大 「ヤイ太郎冠者 三郎殿の 授け給いし妻じゃによつて 否応はなるまいぞ」

太 「ア、そなた様は 良い月日の下でお生れなされた 此太郎冠者は月も 日もなく 真つ暗 暗闇で生れたと見えます」

大 「何はともあれ 目出度う 舞うではないか」

太 「エ、勝手にさうしやれ」

高砂や この浦船に 帆を上げて 月諸共に 舞の袖

大 「目出度いな」

太 「へ お目出度う ござります」

笑い興ぜし 能舞台 鏡の松の 常磐津に 昔へ帰る岸沢の波の鼓の 打ち寄り
て 睦まじかりける 次第なり

三曲

「ながれ」(初代米川敏子 作曲)

箏独奏 野口敏翠

初代米川敏子作曲の箏独奏曲です。たくさん作品の中でも傑作に数えられる一曲です。全体として古典的な響きに特徴はありますが、テンポの変化やアルペジオの使用など、運動性の面白さのある曲です。ただ速く弾けばよいというものではなく、抑制が必要になります。特定の音と倍音を含めて、非常に良く響かせるようになっていたため、豊かな響きが生まれています。

「秋の言葉」

本手 三橋敏優希

野口敏翠

替手 岡崎敏優

西山徳茂一の明治時代に作曲した明治新曲の一つです。歌詞は旧備前岡山藩主の池田茂政によりますが、西山検校自身も出生地が岡山であったため、旧藩主の詩を題材にして作曲したと思われる。秋の虫の音に合わせて「遠砧」が聞こえる嵯峨野の描写を主題として、静かな秋の情緒を表現した曲です。後歌の「古人の秋の言の葉」とは、拾遺和歌集の源順の和歌「水の面に 照る月なみを 数ふれば 今宵ぞ 秋の最中なりける」をさしています。そして歌詞の最後では、この和歌を現在に至るまで伝えて、和歌の道の案内、手引きとして残しているのであると結んでいます。

詞章

(前歌)散りそむる 秋の一葉におのずから 秋涼しく 朝夕は
(後歌)今宵ぞ秋の最中と古人の 秋の言の葉を 今に伝えて敷島の 道の葉と 残しける

邦楽実演家団体連絡会議

一般社団法人義太夫協会	清元協会	一般財団法人古曲会	新内協会	特定非営利活動法人筑前琵琶連合会	常磐津協会	一般社団法人長唄協会	公益社団法人日本小唄連盟	公益社団法人日本三曲協会	日本琵琶楽協会	一般社団法人大阪三曲協会	一般社団法人関西常磐津協会	公益社団法人当道音楽会	名古屋邦楽協会
-------------	------	-----------	------	------------------	-------	------------	--------------	--------------	---------	--------------	---------------	-------------	---------